

「楽しく死ぬために、楽しく生きる」

NPO シニアライフ情報センター 小瀬 有明子

清さんが誕生したのは、1963年2月。厚生省が「レントゲン警告には科学的根拠がない」と販売禁止措置をとらなかったため、サリドマイドの被害にあわれました。

医薬品の開発に携わる人々、医療関係者は、体の不具合で苦しんでいる人、困っている人たちをなんとか助けたいという崇高な意思を持って関わっておられるのだと信じたい。しかし、医薬品は、人にとって異物であるため、効果がある反面、その副作用も必ず起こる筈。「両刃の剣」であることを念頭に置き、その副作用についても情報を公開し、関係者が医薬品の安全性の確保への努力を重ねていくことが重要ではないでしょうか。

自分の命と同様に、他の人の命も大切に思う風土がこれからもっと醸成されていかないと、大変な世の中になっていくように思います。

それにしても、清さんは明るい。「人は『気持ち』に支配されて行動している」、「『気持ち』は行動するエネルギー」と話され、「気持ちを前向きに変えて行動をより良くすることができる」と話されました。さまざまな高い壁が目の前に現れても、なんとか乗り越えようと力を尽くされたお母様は強い人であり、信念をもった方だと思います。きっと当時の日本ではさまざまないじめや差別などもあったと思いますが、「悪いことをしたわけではない自分たちがいじめを受けるいわれはない」との信念で、清さんを教育されたのでしょうか。

清さんが誕生された時から、ずっとさまざまに悩まれたお母様が、たどり着かれたのが、「私が悪いわけではない、あなたが悪いわけでもない。悪いのは政府であり、製薬会社だ。だから何も恥ずかしいことはありません」という言葉に集約されていると思います。

その言葉が、清さんのその前向きな姿勢・気持ちの持ち方に大きく影響を与えているし、その明るさの元になっているのでしょうかね。素晴らしいお母様ですね。

そして、「国や製薬会社に対して恨みなどを持たれませんでしたか」という質問に対して、「脳の中で考える領域が一定だとすると、その領域を恨みで占めてしまうのはもったいない。僕は楽しいことを考えていたい」と返されたその言葉に驚くとともに、共感しました。そうよね。人生なんて長いといっても、ほんの数十年。その数十年しかない時間を悩みだけで占めてしまうなんてもったいない。

病気や自然災害によって、解決できない暗い穴のなかに入り込んでいる友人たちにも、清さんのこの言葉を伝えたいと思う。どんな時でも、楽しいことを考えて生きていくほうが、死と向き合ったとき、いい人生だったなと思えるのではないかしら、と。

貴重なお話ありがとうございました。